生きてはたらく念仏の大きな力

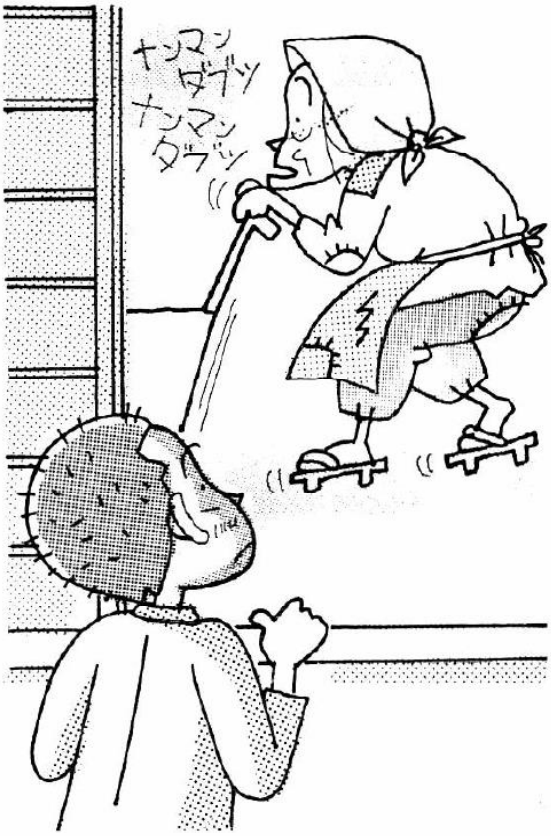
縁起でもない！

ある日ご門徒の奥さんからこんな話を聞かせてもらいました。

年老いて寝たきり状態になったおばあちゃんが寝床で、「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ……」とお念仏をしていたら、うちの主人、「縁起でもない、念仏なんかするな！」と、しかっていたんですよ。

何となく、その情景を頭に浮かべることができました。そのご主人には、おばあちゃんのお念仏が、死へ向かう呪文にしか聞こえなかったのでしょう。

一流大学を出られ、立派に職責をはたされ、数年前定年退職をされた方だっただけに、言いしれぬ寂しさを感じながらも、この奥さんの連れ合いだから、きっとお聴聞しておばあちゃんのお念仏の意味が分かってもらえる日が来るのではないかと思いました。なぜなら、そのときお寺の近所のご門徒さんで、非常に熱心にお聴聞される九十歳近くのありがたいおじいちゃんを思い出していたからです。



活動をはじめる念仏

そのご門徒さんのお宅にお参りに行ったときのお話です。

――自分が子どものころ、家の前の道を腰をくの字にかがめ、乳母車に寄りかかるようにして近所のおばあさんが毎日畑に通っていた。昭和の初めのことだから、ここら界隈のお百姓はみな貧乏だったけれど、そのおばあさんはボロをまとうような身なりで、子どもながら一段とかわいそうにと思うような姿だった。

そんな姿で家の前を通り過ぎるとき、いつも、「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ……」と念仏する声が聞こえてくる。

あのばあさん、あんな貧乏で苦労しながら、何を思って念仏しているのやろう？

そのことが子ども時代からずっと心にかかり、成人してから、あのおばあさんが称えていた念仏はいったい何だったのだろうと、それを確かめたくてお聴聞をするようになったんですよ――

と、昔を懐かしむように話して下さいました。

この話を聞きながら、お念仏は生きてはたらいていることを改めて知らされました。そのおばあさんの念仏は、そのおばあさんの生きる支えであったに違いなかったことでしょう。そして、そのお名号が関係のなかった通りすがりの少年の耳に入り、そして活動しはじめたのです。それが実際に現れた姿として、今この方があるわけです。まさに、そのときのおばあさんの口から出たお念仏は言葉の仏として大きな力となりはたらいたのです。

杉山雲來（すぎやま うんらい）
（岐阜県本巣市・正尊寺住職）